
 専門日本語教育関係機関紹介

海洋科学専攻の学部留学生のための日本語・日本事情 科目と研究留学生のための日本語コース

大島弥生（東京海洋大学海洋科学部）

東京海洋大学は2003年10月に東京商船大学と東京水産大学とが統合されてできた大学で、海洋工学部（越中島キャンパス）と海洋科学部（品川キャンパス）の2学部、水産専攻科、乗船実習科、および大学院海洋科学技術研究科からなっている。外国人留学生は239名（2005年5月現在、うち学部生は47名）で、留学生センターなど独立した日本語教育機関は設けられていない。とはいえ、全学学生数が2800名余という小規模校であり、留学生の存在感は大きい。以下では、筆者の所属する品川キャンパスでの日本語・日本事情教育の取組を中心に紹介したい。

研究留学生の日本語

研究留学生への日本語教育は、補講という形で、両キャンパスで行われている。自然科学系大学院の例に漏れず、学習者が実験やフィールドワークの合間を縫ってクラスに参加するため、長続きしにくい、進度が遅い、といった悩みがある。また、小規模校で開講できるクラス数に限りがあり、レベルに応じた小刻みな編成ができないという難点もある。このような中、非常勤の先生方の努力で、海洋に関連した漢字・語彙・文章を初級後半レベルから積み上げる読解教材や、水産関連の語彙1000個を学びながら書きことばに慣れる中上級向け教材などを独自に開発している。教材は1回完結型のユニットを複数セット用意し、学期途中で来られなくなって次学期にまた挑戦する学習者など、多様な参加形態に対応できるように工夫している。

学部留学生の日本語

学部留学生に対する日本語教育では、レポート作成や書きことばの語彙増強に加えて、水産・環境などについての情報収集と発信を目標としている。たとえば、1年生の段階では大学案内ガイドブックの情報をもとに、各自の動機や計画と学科の特徴とを結びつけなが

らクラスの他のメンバーに説明する活動を取り入れている。2、3年生では、ディベートや口頭発表のスキルの育成を兼ねて、各学習者の問題意識や研究課題についての報告、質疑・討論の練習などを行っている。

多文化混成クラスの実施

このほか、留学生の日本事情科目のうち2科目を一般の日本人大学生にも履修できるようにし、討論やグループ発表を取り入れた多文化混成クラスを実施している。このうち、「コミュニケーション論」科目（担当：池田玲子海洋科学部教授）では、グループ内で各自の異文化体験を提示し、様々な視点から問題解決のアイデアを出し合う活動を通じて異文化理解・多文化共生能力の養成を行っている。「日本社会理解」科目（担当：大島）では、人口・労働・ジェンダー・歴史観などの諸側面から、学習者自身の日本観の形成過程を共に考えたいうで、関連資料をブック・トークで紹介しあい、各自の日本社会の多面的理解の構築を図っている。

これらのクラスの中では、背景の異なる参加者が多様な視点を提供しあえるようなしかけを模索している。

「協働・統合アプローチ」による実践

海洋環境や海洋資源の利用は、立場の異なる多くの人が関わる複合的な課題である。そこで、この分野の学習者に対しての実践では、背景の異なるメンバーの「協働」を活かした活動を重視している。それと同時に、複数の技能の訓練や事柄の学習を「統合」させる手法を取り入れ、複合分野での情報整理・発信の能力育成を図っている。上述の実践の中でも、これら二つのアプローチを用いた授業手法や課題の開発を進めている。留学生に対しては、専門での学習を支える言語能力の獲得と同時に、「協働・統合アプローチ」による授業実践の場での貴重なメンバーとしての参画を期待している。